
魔女と歌うたいの歌

佐和島ゆら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女と歌うたいの歌

【Nコード】

N5324I

【作者名】

佐和島ゆら

【あらすじ】

魔法を使う一族に生まれた「ちより」は、強い魔力を持ちながら魔法を使うことができない十三歳。幼馴染の「楓」は歌の才能がある。ちよりは尊敬していたのだが。

プロローグ

軽やかな歌声が、楓の特徴だった。忘れられない思い出がある。爽やかな風が流れ、きれいな青空が見える五月の休日。公園の木々の隙間から射し込む太陽の光を浴びながら、一緒に歌った。五歳の幼い子供でも、思わず聞きほれてしまう程の楓の歌声。つつい私は歌うのをやめて楓を見てしまう。

「ちよりも歌ってよ」

私が歌っていないのに気がついて、楓は唇をとがらせる。私は横に首を振って言った。

「わたし、かえちゃんの歌、聞きたいの！」

楓は照れて顔を真っ赤にして、両手をすり合わせていたが、やがてこう言った。

「ほ、本当？」

「うん。本当だよ」

私は思いっきり笑いながら、楓の手をぎゅっとにぎった。

第一話

「また母さんと喧嘩したのか。それで」

大学に入ってから一人暮らしをしている兄のアパートに行き、狭いワンルームにどんとあるベッドに背中を預けて体育座りをする私に兄は言った。

「だって、くどくどうるさいんだもの。魔法を使えるのって、結局きっかけでしょう？ それなのに出来ないのをあんなに嘆きながら、くどくどくどくど」

兄は紅茶の入ったカップを口につけて言った。

「……母さんは、難しい人だからな。本家を継いではいいるが、魔法の才能に関してはかけら程度にしかない人だから」

「気持ちには分かるけどさあ。期待しすぎも重いつての！」

私も興奮する気持ちを落ち着けるために、兄が入れた紅茶の入ったカップに口をつけた。いつもダーズリンなのだが、今日は林檎の甘い香りがする紅茶だ。趣向を変えたのかなと思いつつ、私は深く息をついた。まったく今日は最悪だった。

私の一族は昔から魔法使い、魔女を輩出するイエだ。とはいえ、長く続く家のせいか弱体化も激しかった。お菓子の家をつくったり、使い魔を使役したり、ものを移動させたり。そんな程度だ。だいた魔法を使えることは役にたつのかと言われても困ったりする。少なくとも、魔法より家電が役にたつ世界なのだ。

だけど昔から本家である私の家を継ぐのは、本家生まれの兄妹の中で力が一番ある人だった。

他の人間がどんなに魔法を使うことが出来なくてもかまわない。一族当主がしっかりしてさえすればいい、そういう不文律があったそう。ただ、先代の、つまりは母さんのお父さんが当主の時に話は変わった。

一族はじまって以来の最高の魔法使い、同時に歴代最悪の当主と呼ばれた人だったそうだ。

責任を軽視する気質に加え、父親を気まぐれでやっていると思われる程に自由奔放、自分勝手な人だったそうだ。人当たりはよく見えるが、実は短気で小心者だったそうだ。

家にある儀式の道具（貴金属）を金になりそうだからと売って、家族に暴力をふるって、私の母さんを含めた兄妹やおばあちゃんは結界魔法を得意とする親族が保護していたそうだ。結局その人のせいで本家にお金がなくなってしまったそうだ。そこで兄妹の中で一番経済力と経済感覚を持ち合わせていたけど、魔法はほとんど素人同然の母さんが家を継いだ。けどそうでなければ継ぐ人はいたのだ。他の兄妹には経済力はないらしいが、魔法に関しては父の力を引継ぎ、一族で一目置かれる程の腕だそうだ。魔法を使えないことにコンプレックスを持つている母さんは、昔から兄妹に馬鹿にされていて、今も色んな状況が相成って母さんは兄妹と仲が悪い。そしてその影響は私達にもきていた。私が生まれるまで兄はあまりない魔法の能力を引き上げるよう勉強させられ、生まれながら強い魔力を持った私も、母から魔法の勉強をさせられていた。

私はお腹をさすった。

「何か、怒ってたらお腹減ってきちゃった」

兄は小さく笑った。

「何かつくるか？」

私は兄を見た。

「いいの？」

「いいよ」

「やった」

私はお菓子ブックを置いているラックを見ると首を傾げた。

兄の授業で使うのだろう本や専門書、好きな小説が置いてあるが、肝心のお菓子ブックが見当たらない。

「お兄ちゃん、お菓子の本ないよ？」

「え、ああ。奥だよ、ラックの奥に移したんだ」

「そうなの？ 取りにくいなあ」

私は本を一度寄せてから、ラックの奥からお菓子ブックを取り出した。

そしてぱらぱらと流し読みしながら、ふと思った。

いきなりどうしたのだろう？ お兄ちゃんは……と。

兄のお菓子作りの腕は、家族はもちろん友達や知り合いなどに知れ渡っている。高校時代兄の下には、季節のイベントごとにお菓子作りのアドバイスを求める女の子が絶えなかったそう。兄の友達は、伊織はどんなに可愛い女の子が来ても、しれっとした態度でしゃべるのが何かむかつかと冗談交じりで言っていた。だからラックの正面に堂々と本を置いていても、平気なはずなのに——私は一つの可能性を思いついた。

私は言った。

「えっとね。これ」

兄は眉をひそめて、私が指を差した示したページを見た。

「また、難しいものを言い出すな。あんまりコンポートは好きじゃないから、うまくつくれるかな」

「大丈夫だって、お兄ちゃん。お兄ちゃんは十三年以上のキャリアを持つベテラン魔法使いなんだから。それよりさあ」

「何だ」

兄は頭を傾げながら、私を見た。

「もしかして。彼女出来た？」

「……は？」

たつぷり間があいて、兄は私を凝視した。

「ああ、そうなんだ」

私が頷くと、兄は頭の後ろをかきながら言った。

「何で分かった？」

「うーん。直感？」

一応、分かった理由はある（お菓子ブックの位置とか、今日は紅茶の葉っぱが違うとか……多分相手の女性の趣向や、お菓子作りが得意ということが女の子っぽいと実は考えている兄の格好づけじゃないかとか）けど決め手は「何となく」という気持ちが大きかった。兄はため息をついた。

「十三歳でも、女の直感つてあるのかよ」

「へへっ、ねえすごい？ 私すごいかなあ？」

兄の言葉に調子に乗って私は兄に聞いてみた。やった、大人扱いしてもらえたと思えて兄の言葉が嬉しくてたまらなかった。兄は言った。

「ああ、すごい、すごいよ」

そして軽く額にでこピンした。

私は目を瞬きながら小さく声を上げると、兄は言った。

「だけど、趣味が悪い」

「ええ、そう？ 悟られる大学生の方が問題あるよ。もう大人でしよう？」

「ああいえばこういうようになったなあ。ちよりは」

兄は苦笑いをしながら、集中してくると言ってキッチンがある廊下に出た。私は額をさすってから、両掌で口を覆い、くすくす笑った。そうか、兄に彼女が出来たのか。

出来るのかなあとちよっと心配だったのだ。

趣味の関係で色んな女性と関わっていた兄だけど、まるで浮いた話が聞こえてこなかった。

もう少しで二十歳になるというのに、兄は大丈夫なのだろうか？

なんてちよっと思っていた。

ああなんて、楽しい気分だろう。甘酸っぱい気持ちで胸の中がいっぱいになる。

恋人かあ、私にも兄のようにいつか出来るのだろうか。

まだ想像もうまく出来ない。どんなに楽しいのだろうか、恋人がいるって。

楓にも、教えちゃおうと私は思った。

幼馴染の楓は、兄のことをよく知っているし、自分のことのように驚いてくれるに違いない。明日は楽しみだなあとにやにやしている
と、部屋の扉が開いた。

真っ白なお皿の上に、注文の品が上品に鎮座していた。

アイスがとろりと林檎のコンポートと混ざり合いながら、ワッフル
にかかって、私は胸の中の音が高く鳴るのを感じながら、皿の上の
デザートを見つめた。

「初めてだから、味は保証しない」

私は心の中で呟いた。

そう言っただけで絶対、おいしいんだよね。ちょっと悔しいくらいに。
お菓子をつくる魔法しか使えないと母は兄をこっさり影で嘆いてい
るけど……魔法を使えない私にとって、兄はすごくて頼りになって、
大好きだ……恋人がいよいよといまいと関係ない。

第二話

今朝は、秋の空気に触れたせいか、夏と違って触れたら手を引つ込めたくなる程冷たい雨が降っていた。

スカイブルーの生地の手端つこにピンクの小花の模様をあしらった傘をさして、少しでもモチベーションをあげながら、私は家を出た。学校に向かう途中の信号で楓を見つけて、私と楓は学校へ向かった。楓は言った。

「今日は寒いわね。昨日まで涼しくて、気持ちよかつたんだけど」

「そうだねえ。最悪だよ、さばりたかつた」

私は唇をとがらせる。すると楓はまあまあと私をなだめて言った。

「今日は、クラス会で合唱コンクールの役割分担があるでしょ。さぼって自分のやりたくないことをやるはめになったら、最悪じゃない」

「あ、そっか。最悪だ、それ」

そつだ、とうとう今日なのだ。はたつと私は気づいて、楓に言った。

「楓。楽しみにしていたもんねえ。合唱コンクール。皆と一緒に歌いたいって」

「うん。ちよつと今、ときどきしてる」

楓は胸に片掌をあてて、大きく息をついた。頬は寒さだけではないだろう、桃のような優しい赤色に染まっていて、目の大きさは如実に楓の興奮を教えてくれた。

「中学の入学式から楽しみにしてたもんね。どうよ、ねえ、楓さん。今の心境」

今朝、テレビで見たインタビューっぽく、妙に低くてねちよつとした声を出した。楓はやだあとと言った。

「ちより、声きもいよ。なんか、今日見た番組の人に似てる」

「えへへ。まねしてみました」

「うあ、じゃあ……何も話すことはありません」

すました顔でぴしりと楓は言った。

それは今、私がまねしたインタビュアーに質問された、すました顔の芸能人が言った言葉だった。

私はそっちもまねしてんじゃないと笑うと、楓はええそうですよとすました顔のまま言った。

昔から幼馴染である楓の興奮が手にとるように分かってつたわって、私は嬉しかった。

楓は昔からしつかり者で、感情的になりやすいというか、すぐになげやりになる私をいつも優しくなだめてくれる。昔から才能を持つために大人に囲まれレッスンを受けてきた楓は、私よりずっと精神的に強くてうらやましい。同じ年、格好なのに、どうしてこうも違うのか——ため息をつきたくなる。

「もつと集中して魔力の流れを把握しなさい！」

唐突に魔法の勉強中にとんでくる強い口調の母さんの言葉を思い出す。楓と違って才能を目覚めさせられない私はまだまだ。というか、まだまだでいいじゃんと思ってしまう。そこが諦めない楓との最大の違いだ。楓といて、いつも楽しくて、いつも差を感じてしまう。人間的な差を。だから……こんな興奮して子供っぽい楓を見て、落ち着いて、安心する自分がいた。ほっとして、無邪気にはしゃげる自分がいた。

昨日知った兄の話で盛り上がりながら、私達は学校への道を歩いた。学校近くにある廃田となった後、いつのまにか花の種子が田んぼ中に散らばって花畑に変わった場所に行きがけると、楓は言った。

「雨の勢いが強いね。なんかコスモスの蕾が雨にうたれてしょげちゃってるよ」

「あーそうだね。でも今日だけだって雨。明日からしばらくはまた秋晴れらしいし。もう少ししたらきつと、また花畑になるよ」

「うん。それも楽しみなんだよね」

楓はにこつと私に笑みを向けた。私も小さく頷いた。

「私も楽しみだなあ」

言いながら私は想像していた。

秋晴れの優しい青の空の下、赤、白、ピンクのコスモスの花に囲まれて、風に軽やかな歌声をのせる楓の姿を。薄いガラス一枚越しで見つめていた。

第三話

給食を食べ終えた昼休み、教室でだらだらと楓としゃべっていると校内放送があった。

「一年D組 国城楓さん。職員室まで来てください」

二度アナウンスが繰り返された。私が楓を見ると、楓は不思議そうに首を傾げていた。私は言った。

「呼び出しだね。楓」

うちの学校は基本的に校内放送での呼び出しはない。だから裏を返せば、よっぽどの事態があった際に校内放送が使われる。タバコをすった証拠が出てきたとか、デリヘルをやったという証言が出て、事情聴取のために緊急で呼び出されるとか少なくともあまりよくないことだ。

不安を覚えて思わず視線を下げると、楓は私の肩をたたいた。

「大丈夫だって。全然何もやってないし。まあ、たいしたことじゃないでしょ」

先生、ちよつとしつかりしてないし、私に連絡すること今まで忘れていたんじゃない？ 楓は余裕のある表情を私に向けていた。微笑すら浮かべる楓に不安が和らぐ。

「そうだね。ごめん、すぐに不安になっちゃうんだよね私」

「全然気にしてないから。それにしても、ちよりは本当昔から反応が小動物みたいだねえ」

「あ、うう。駄目かな、やっぱり」

私は上目遣いで楓を見る。

すると楓は顎に自分の指を当てながら、天井に目を向けた。

「まあ……私は慣れきっているからかなあ、ちよりのそういうところ何とも思わないし。それがちよりなんだよねと微笑ましくなっちゃうかな」

「本当、それ？」

「うん、本当」

楓は頷く。私は嬉しくなつて楓に軽く抱きつきながら、ありがとうと言った。楓は私の悪いところを何でも受け止めてくれて、本当理解あるなあと思った。家族でもここまで受け入れてくれたりしない悪いから直せと言ってくる。

私は私なんだから。成長なんて無理をしなくても、そのままの素材のままでいいじゃない。楓はそのところ、よく分かっている。

「いつてらっしゃーい」

私は満ち足りた心で、教室を出て行く楓の姿を見送った。

でも、楓は戻って来なかった。

昼休みが終わっても、五時間目が終わっても。

六時間目は合唱コンクールに向けての話し合いの時間だった。指揮者やパート決めが行われるのだが……楓の戻る気配はない。不安でいてもたつてもいられず私は職員室に向かうと、廊下の途中で担任の松木戸に会った。

私は言った。

「先生、楓を知道吗？ 昼休みから全然教室に戻って来ないんですけど」

「ああ……国城か」

松木戸はそこで言葉を切つて、神妙な顔で私を見た。

何か考え込んでいるようで、視線があちこちにいたり頭を軽く下げたりして落ち着かなかった。

見ているだけで不安が高ぶる行動だと思っていると、松木戸は言った。

「国城なら、保健室だ。ちょっと今、感情が高ぶっていてな……次の時間も出られないな、多分」

「え？ 本当ですか？」

私が素つ頓狂な声を上げると、松木戸は深く頷いた。

「半部は国城と仲がいいよな。ちょっと気を落ち着かせてもらって

もいいか？」

「はい。あ、でももう休み時間が終わる……」

その声を落とした私に、松木戸は言った。

「半部の声のパートは何だ？」

「えっと、ソプラノです」

「じゃあ、そのパートに入れるよう皆に伝えておくぞ」

その言葉はこの時、本当に天からの恵みと言ってもいいくらい有難かった。

「あ、助かります。ありがとうございます」

私は丁寧に頭を下げて、そのまま保健室へ向かった。

保健室にある長椅子に楓は座っていた。

充血した目、興奮しすぎたのか、肌が赤い。頬にはくつきりと涙の跡があつて……一時間ちよつと前に見た姿からは想像がつかない程に楓は、見ていて痛々しさを覚える顔となっていた。
私は言った。

「楓……どうしたの？」

楓は鼻をすすり、かすれた声で言った。

「ちより……どうしよう」

楓の目がみるみると潤んでいく。楓は嗚咽を漏らしながら言った。

「私、合唱コンクールで歌わないでって、指揮者をやれって」

第四話

夜、私は怒りをぶつけられる場所にいた。

口当たりがふわふわと軽くて、紅茶の香りが心地いい、そんなシフォンケーキが出された。可愛らしくて雰囲気が柔らかい、お嬢様といった感じのするおしとやかなケーキを、私は味わうというより喰らうと表現した方がいい食べ方で、口に放り込んでいった。そしてむせた。

「……気持ちは分かるが、少しは落ち着け」

兄は林檎ジュースが入ったグラスを私に差し出しながら、ぽんぽんと背中を優しくたたいた。私は口の端にケーキのカケラをつけながら、林檎ジュースを一気に飲んで。

「う、うるさーい。こうでもしないと、気持ちが落ち着かないよ！」

「……そうだろうなあ。その様子だと」

「そう！ というわけで次はシュークリーム！」

私は食べ終えたケーキの汚れがついた皿を兄に突き出した。

兄は一息ついた。

「……分かったよ、ちょっと待ってくれ。だけど魔法とはいえ、丹精を込めてつくっているんだから、気持ちは分かるけどお菓子をそんな乱暴に扱わなくてくれ」

まっすぐに私を見てくるので、フォークの先を口に軽く当てながら私はこくりと頷いた。やばい、ちょっとお兄ちゃんは、マジだ……

「善処するよ。うん」

「なら、いいよ」

いつもの柔らかな雰囲気に戻って兄はキッチンがある廊下へ出た。自分の魔法に兄なりにプライドを持っているのだろっ。

例え、母さんに魔法に関して諦められていても。

「……うあ、でもー」

私は身近にあったクッションを抱え込み、頭を押し付ける。

ああ、本当今日のこと程、たまったものはない。

何でそういうことになったのか。

松木戸に抗議に行ったけど、のらりくらりとかわされて、最後はクラス会を通して決定したなんて言われて強引に話を終わらされてしまった。楓は歌が得意で、本当に素敵な歌声で、合唱部ではよくソロパートを担当するくらいに活躍している。

普段、松木戸は楓の才能を誉めそやしているくせに。そう言えば、楓にこう言っていたんだっけ？

「お前は歌がうますぎる」

「国城に歌わせれば、皆の声を引き立てるんじゃないで、自分の声を引き立たせる歌になると合唱部の顧問から注意がきてる」

「皆平等に勝負しないといけない。なえてしまうだろう、クラスに大きな差がついてしまうのは。だから本当頼むよ」

いいじゃん、圧倒的な優勝で。楓の歌声は本当に軽やかで素敵なんだから。課題曲にしつくりくると確信出来る。

軽やかに風に舞う花びらがはつきりと想像が出来るような応援歌なんだから。

平等って、何よ。

楓を道をふさぐ大きな石みたいに扱ってさ、歌いたがっていた楓をどかしてさ。そんな平等、きれいかもしれないけど幼馴染の私から見ればうそ臭くてたまらない。

楓の涙を知らずに、皆はこのきれいな平等という道を歩いて競うのか。

「本当、ひどすぎ」

私はぼそつと呟いた。

柱にかかっている時計がリズムよく針を動かしていく。何か、兄が遅い。扉を押して廊下を見ると、兄の姿はなかった。

ただコンロの上にある白いお皿にシュークリームがあって、私は頭を傾げた。

なんだ、これ？ って感じだった。

仕事で忙しいけど、夕ご飯をつくっておいたからいいよねって感じがするくらいの放り出しっぷりに困惑する。

とりあえず一口齧りついた。

軽い食感が気持ちいい皮だった。優しく甘いカスタードクリームの喉の通りが良くてたまらない……相変わらず丁寧でおいしいシュークリームだった。

だけど、いつも感じる幸せな気分になれない。満足感が得られない。さつき乱暴に食べた紅茶のシフォンケーキにすら感じれたのに。

お兄ちゃんがいらないせいだ……と思った。

お兄ちゃんのお菓子の側にはお兄ちゃんが必ずいた。

私に声をかけてくれた。だけど今はいない。

もしかして乱暴な食べ方に、本気で怒った？ 呆れた？

不安にかられて心細くなり、下唇を噛んで私は何とかざわつく自分の心を抑えつける。

顔を強張らせながら私はくつをひっかけ、外に出た。

狭い兄の部屋に兄の姿はない。だから外に出たはずと考えた。

外に出たというあまりに範囲が広い話に目眩がする。怖くてたまらなかった。お兄ちゃんに嫌われたら、嫌だ。私の心の寄りどころが離れてしまったら、私は辛い時どうすればいいの。必死な気分のまま外に出て、私は立ち尽くした。

お兄ちゃんは楽しそうに電話をしていた。笑みで目のふちに深いしわが出来ていた。

私は深く息をついた。気持ちも顔も強張っていた自分が馬鹿みたいだった。

へなへなと崩れ落ちそうな膝に活を入れて、私は声を上げた。「お兄ちゃん！」

目を見開いて兄は私を見た。

「……っつ、何だ、ちよいか」

そして電話口の相手にこう言った。

「ごめん、妹が。後で電話し返すから。……うん、ありがと。悪いな」

普段の兄の優しい口調なのだが、妙に甘い感じがする響きがあった。私は聞いた。

「誰と電話？」

「友達だよ。明日のゼミの話してたんだ」

「ふうん、そうなんだ」

私は目を細めた。

直感的に嘘だと思った。

さっきの電話口の相手に対する言葉は、深くて甘い思いやりが詰まっていた。友達に対しての態度とは思えない。きっと、彼女と楽しく電話をしていたのだろう。

こっちはすごく不安を覚えていたのに、兄は彼女とラブラブしていたのかと思うと、ちりりと胸の中が焦げるような熱と痛みを感じた。兄は言った。

「それより、いきなり部屋から出て、どうしたんだ？」

「え、えーと」

いきなり質問されて、思わず私は戸惑ってしまった。

兄に嫌われたと思って不安にかられたなんて言うのは、間抜けで恥ずかしい気がした。

私は頬が熱くなるのを感じながら、横に大きく手を振った。

「ええと。怒っていたら何だか体、熱くなつて。外に涼みにきたの」

「ふうん。そうなのか……」

「うん、そう！」

私は大げさなくらい大きく頷いた。

「あ、アイス食べたいなあ。本当熱くてたまらないよ」

兄は変な間をあけて私を見ていたが、やがて口をむずむずさせながら言った。

「そうか。じゃあ、アイスをつくろっ」

その瞬間、いいことを私は思いついた。

今も実は心の底にある不安やちりりと焦がれる熱と痛みをとる、いいことを。私は兄を見た。

「いいよ。悪いもん、今日はお兄ちゃんに魔法を使わせすぎちゃった。疲れたでしょ。私、コンビニでアイス買ってくるから、大丈夫」兄は眉をひそめた。

「女の子が夜間に一人で歩くのはよくない。危ないぞ」

「大丈夫だって。歩いて五分じゃない」

「そういう問題じゃない。ちよつと待て。財布を取ってくるから」兄は部屋に戻っていった。その背中を見ながら、やっぱりお兄ちゃんはお兄ちゃんだと思った。私が少しでも危ないことをしようとしたら、すぐに安全を守ろうとしてくれる。

やがて兄はジャケットを羽織って外に出た。私は片腕に手を添え体を寄せた。

「おい、重いぞ」

兄は言った。

私は兄の言葉を見殺して、兄に強く擦り寄った。

「えへへ。お兄ちゃん、あつたかいねえ」

「……まったく。甘えたがりだな、ちよりは」

兄は私の頭を撫でた。

私は目をつむって、兄の掌の温かさを、感覚を集中させて味わうと、不安や焦げるような熱と痛み等の心の不具合が、静かに治まってくのを感じた。

第五話

兄が魔法に関することで母に「頑張らなくていい、母さんは無理させすぎた、ごめんね」と抱きしめられたという翌日。六歳の私のはじめて魔法について母さんの三時間に及ぶ授業を受けた日。

「おかあさんがこわいよあ。おかあさん、ちよりがきらいなの?」と泣きながら、兄の下に行くと、兄は私を自分の膝にのせて頭を優しく撫でてくれた。

「そんなことないよ。母さんは、ちよりが大好きだって。ただね、ちよりはとてもすごい力を持っているんだ。だからちよつと気合を入れて魔法について教えているんだよ」

「ほんとに? こわかったよ。手をつねられたよ、見てよ」

母の矢継ぎ早に出てくる言葉を受け止めきれず、思わず頭がぼんやりとしてしまった私に、母は怒って手の甲の皮膚をつねった。そして言った。

「あなたの未来に関わる話なのよ! あなたは立派な半部の血に相應しい力を持っている。お母さんみたいに能力がほとんどないと、皆に馬鹿にされちゃうの。当主でも侮られちゃうの! だからあなたは勉強して半部家に相應しい魔女にならないといけないのよ。母さんみたいな苦勞を背負わせたくないの、なのに、ちよりあんた何やっているのよ!」

私の話を聞いて兄はぽつりと呟いた。

「母さんは……ちよりを愛しているよ。母さんは、ちよりの前に一人産産しているからね……ちよりを授かった時は、何としてでも産みたいって、面と向かって名前を呼びたいって。何度も僕に聞かせていたよ。ただ、母さんは複雑だからね。過去とうまく折り合いがつけられない、僕たちの母さんであって、母さんじゃない面がある人なんだ」

「おにいちゃん、言っていること、むずかしいよ」

私は兄の言葉を理解出来ず、むずがりながら兄を見た。すると兄は蕾が開くような、柔らかい笑顔を私に向けた。

「ちよりは、本当に母さんに期待されているんだよ。僕と違って、ちよりには何か難しい問題があっても、その問題をぶつとばせるくらいにすごい力を持っているんだ。だから、ちよりは僕よりずっと胸を張ってもいいんだよ」

じゃあ、助けてよ。魔法。

私にこの恐怖から逃れる術を、授けてください。

鋭い言葉は心にぐさぐさ刺さりました。心は何度も竦みあがりました。だけど時の感覚がよく分からなくなるくらい、責められたら、脅されたら、頭がぼんやりとしました。

涙は枯れました、顔が熱くて痛いです。涙と鼻水が乾燥してひりひりします。

私を助けて……お兄ちゃん。お兄ちゃんじゃなくてもいい、誰か、助けて……

私の頭の横に掌が置かれた。

クラスメイトで学級委員長の久保田さんが私に詰め寄った。

「何にも、邪な気持ちはないって言えるのかな。私はそうは思えないよ」

そう言うと、後ろで数人のクラスメイトが声を上げた。

「国城が久保田さん差し置いて指揮者なんておかしいじゃん。指揮者はクラスの委員長がやるのが慣習だったのに」

「しかも理由が圧倒的に優勝しかねないから、レベルの均一をはからなきゃいけないって信じられない。そんな理由で指揮者になった人間の下で、私達練習しないといけないの」

「下手なひいきよりひどくない？ 国城が指揮者を引き受けたのって、まあ自分に自信があるからでしょ、歌がうまいから……教えて

あげる、指導してあげるって感じなの？」

「そしたらきもーい。くぼっちが相応しいじゃん、私たちの気持ちとか、性格とか分かってるしい。私、きもい人、嫌いだなあ。自意識過剰っぷりにさびいば出そう」

私は下を向いて嗚咽を漏らしながら言った。

「ち、がう。楓は……そんなことを」

する子じゃないと言おうとしたら、前におりていた髪を久保田さんは上げた。そして強くて、心が、震えが、止まりそうなくらい凍る目で私を見て、前髪を上げた手で強く壁に頭を押し付けられて痛くて、もしそれでも視線をそらしたら恐ろしいことをされるんじゃないかって思った。

さんざんさっきまで久保田さんは自分の力をアピールしていた。さらに周りの子達が、もう助けてあげなーいと。何も協力したくなーいと声を上げた。

具体的な例を挙げながら意地悪な考えを言葉の節々に出して、楽しい声でお祭りの準備する時みたいに盛り上がっていた。どんどんと容赦のなさが跳ね上がるアイデアに私はついていけず、疎然として心が激しく擦り切れていった。正直今の私の意識はもう、彼女たちがぶつけてくる言葉の嵐に翻弄されてはいない。とつくに心が折れていた。今の私はそう……風の人に船から放り出され、必死にもがいて救助を求めるけど助けはなくて、海の底からやってくる人魚達に足を引っ張られて沈んでいくだけの、体のいい人魚達の玩具でしかなかった。

最後はきつと風の海に体の形をした心がばらばらに散ってしまうのだろう。さっき体から両腕を引っこ抜かれた。人魚達は楽しそうに振り回して、どこかに隠した。

今、私の目はくりぬかれたから、私はきつと両腕を見つけれないだろう。

何でこうなったのか……よく分からない。

いきなり放課後、久保田さん達に呼び出された。

確かに本来慣習どおりなら久保田さんが指揮者をやっているはずだった。しかし指揮者に選定されたのは楓で……楓がそれを受け入れたのは、何か邪な気持ちがあつたのだろうとむちゃくちゃな言いばかりをつけてきた。

楓はそんな悪い子じゃないのに……だけど玩具からそんな言葉を何度出されても、誰も納得してくれなかった。

皆が望む言葉じゃなきゃ、人魚達は満足出来なかった。

「しんじられなあい」

「嘘だ」

「幼馴染だからって、気をつかわないでいいのよ」

いっぱい、いっぱい言葉の弾丸を私に打ち込んできた。

何度もそう言われたら、私の中の楓はほとんど彼女達の言うような、欺瞞に満ちた少女になっていくのを感じた。あれ、本当の楓って何だったっけ？ 心の目を奪われたから、もうよく分からない……両腕を抜かれたから触って確かめられない。遠くから軽やかな楓の歌声が聞こえてくる。きつとどこかにいるのだろう。だけど私は人魚達に遊ばれて、ちつとも心の中にいる楓に会うことが出来ない。人魚達が教えてくれる楓に、耳元で耳障りな欺瞞に満ちた言葉を囁かれている。

久保田さんは言った。

「もう結構な時間だねえ。六時近いかも。今日のところはまあこれでおしまいにするけど。ちよりちゃんから全然話が聞けなかったし、明日もやらないと」

「明日はもつと、ちよりちゃんが素直に言葉を出せるように私達努力するから。ごめんね、私達優しすぎて、質問、よく分からなかったでしょ。まあしょうがないかもね。理解力足りなそうだしちよりのつて。じゃあもつと直接的なのがいいかな」

そつと久保田さんは私の耳元に口を寄せた。

「私、十分でどんな人の口も割らす、すごい知り合いがいるんだよ。ボクシングをやってたんだって。その人に手伝ってもらったら、話が早いかもね」

その言葉を聞いてごくりと私は唾をのんだ。唇の震えが止まらない。怯えきる私とは対照的に晴れやかな笑みを久保田さんは浮かべて言った。

「明日は、楽しみにしててね。ちよりちゃん」

久保田さんやその取り巻きは教室の出口に向かう。

そして最後に久保田さんが教室から出ようとした時、私は叫んだ。うるさそうに眉をひそめながら久保田さんは言った。

「んー、どうしたの。うるさいよ」

私は呂律の回らない声で謝った。

「ごめんなさい！ ごめんなさい。私、嘘ついてました。く、久保田さん達が言ったとおりなんです！」

楓は皆を指導してあげなくちゃなあって言っていました。

すぐく上から目線で、皆の歌を評価していました。

久保田さん達が言うこと、全部大当たりなんです！

そうして私は嘘をついた。楓は久保田さん達が言うような言葉なんて、一言も言っていなかった。昨日遅くにかかってきた電話で、気持ちを落ち着かせたのか、自分の役割を果たしたいと謙虚に言っていた。

だけどそう言ったって、久保田さん達は満足出来なかった。

久保田さん達が満足する真実は、私の口から出る嘘からしか生まれなかった。久保田さん達は、私の言葉にちよりちゃんは分かってくれると思ったよと言って林檎ジュースをおごってくれた。飲む気は起きなかったけど、周りに久保田さん達がいて飲まない又何だか恐ろしいことが再び起こりそうな気がして、必死に愛想笑いをしながら

ら林檎ジュースを一気に飲んだ。

林檎ジュースが体中に染み渡るのを感じる。だけど一気に飲んで周りを見渡した時、笑顔の仮面を貼りつけたような表情で皆は私を見ていた。そして同じ仮面をつけて私も周りを見ていたのに気がついた。

「あ……」

私は言葉を失った。

第六話

翌日より合唱コンクールに向けての練習が始まった。

だけど、散々と言っている程にまとまりのない練習だった。

「あの、ソプラノの人。もっと声を出してください。ここから声を出さないと曲が盛り上がりませんです」

「……木地さん。アルトパートを歌ってください。サビ、ソプラノパート歌っています」

ゆっくりしつかりした声で楓は言った。

木地は名指しで注意されて、ふてくされた態度で「私、頭悪いんで国城さんの言っていることわかりませーん」と言った。

真面目にやりましようと呼びかけても、小さく嗤う人もいた。それでもはじめの頃は、一部にしかすぎなかった。何か、

態度悪いよねえ。委員長とか、その周りと後でこっそり私に耳打ちする人もいたのだ。しかし……段々と人数が増えていった。

教室中に、ぐるぐるとまわる悪意が皆に少しずつ染み渡って、はじめのうちは一部のクラスの人間の態度の悪さに疑問を呈していた子も、沈黙を口に宿した（色々と楓を擁護したらよくないと悟ったようだった）そんな無関心を決め込む連中、悪意に便乗する連中がいた。便乗する連中が増えれば、はじめは練習妨害程度だった行為は加速した。

悪いアイデアは、湧き水みたいにあふれ出てくる。そして実行に移される。

普段先生に意見がある奴がいるかと言われて、皆表情を消して、普段たてる音すら消えて、沈黙で話を流そうとするのに。

皆の目は輝いて、声は活発で、無邪気だ。

「国城にーどうやってこの世から消えてもらうか。考えよーぜ」

「シカトしたらいいと思います」

「息をするのを許可制にしたらいいいんじゃないね」

「一息、百円」

「いいアイデアだけども。歌菜的に、名前よぶのもむかつくから。いい子の先生のペットに相応しい新しい名前を決めたいなあ」

「えーあいつがペットって、可愛いもんか。どっちかっていうと家畜だろう」

「あはは。ひつどいねえ、最高だよ。でも家畜なんて誰か様のためになるものかな。私はうざい害虫にしか見えないけど」

本来合唱の練習時間にあてられる放課後。教室の一角では久保田さんや久保田さんと仲のいい人達が集まってこんな物騒な会話が繰り広げられた。またクラスで力を持つ男子の一人が机に上がって、歌を歌ったり芸能人のものでまねをして周囲を盛り上げていた。雑誌を広げておしゃべりや、昨日のテレビ番組について声高に騒いで盛り上がっている人達もいた。

そんな中、楓は自分の席の上に立って、一人もくもくと指揮棒を振っていた。クラスの喧騒の中ではすごく浮き立っている、はじめは顔を真っ赤にしていたけど今は目に力がなく、表情も消えていた。顔を下げることが許されないから、まっすぐ前を見て、指揮棒を振り続ける痛々しい様子を、私は物騒な会話をする久保田さん達の末席で、きちんと久保田さんたちの言葉に頷きつつ、ちらちらと楓を見ることが出来なかった。

皆が、合唱の練習も真面目にやらなくなり、こうして休み時間のように騒ぐようになった。元々合唱練習は先生がほとんど介入しない、自分達でやるという自主性が強いものだった。

だからこそ指揮者として皆をまとめないといけないから、楓は声を出して注意した。

すると――

「何で、あんたに指示されなきゃいけないの？」

「本当、真面目だね。死んじゃえばいいのに」

「私達の総意は、あんたの下なんかで歌いません。それ分かります

う？ 分からなくてまだ練習しようって言うなら、国城っちはちよ
あと、頭弱いんじゃないですかあ」

特別学級でお勉強した方がいいかもしれないねえ、あはははは。
ここまで散々言われても、楓は言い返した。

「な、何言っているの！ 私はただ皆とがつ」

言葉が途切れる。くぐもったうめき声とわき腹をおさえる楓。

蹴りを入れた久保田さんが、鼻であしらった。

「あんたさあ、そんなに練習が大好きなら一人でやればいいでしょ。
私達に押し付けないで。うざいし」

そこで……唐突に久保田さんの目が生き生きしだした。

「あ、私。いいことを思いついた国城は指揮者でしょう？ 椅子の
上に立って指揮しなさいよ。練習しろしろ言うなら、まずはじめに
自分で態度を示すって当然じゃない」

荒い息をつきながら楓は久保田さんを見た。

「一人で？」

久保田さんは笑いながら、大きく頷く。そして周りを見回す。

「ねえ、皆。私のアイデア、なかなかよくない？ 皆で……立派な
国城さんの指揮者姿を見ましようよ。やる気がみなぎったすばらし
い指揮だったら、練習に参加してもいいかもしれない」

「国城のやる気をはかるかあ。まあいいんじゃない」

「そだな、うん。ジャッジしてやるよ。国城のやる気」

「国城さーん。頑張つてよ。私達を失望させたら、罰ゲームもんだ
よ。重罪」

「というか言葉と態度があってない。嘘つきの証明にもなるかもね」
そして皆が盛り上げて、その空気に押されて強張った表情を浮かべ
ながら靴を脱ぎ、椅子の上上がる。

試すなんて、詭弁だと思った。皆が楓にやらせているのは首をくく
る形の死刑のために椅子に上げるようなもの……単なる公開処刑だ。
私は口元を押さえた。気持ち悪くしようがない。

こんなのひどすぎる。おかしいと思いつつも、どうにも出来なかつ

た。異議を唱えれば、今度は私も椅子の上にながらなきやいけない。そんなのは耐えられない。皆の視線に耐えられない。

本当は逃げ出したかった。だって幼馴染のピンチに、立ち尽くすことしか出来なくて、この事態を招いた一端にいる罪深さ、そして無力さに震えているだけなんて、苦すぎる。ああもうこんな事態、全部全部吹き飛ばしてしまえばいいのに。大風でも吹けばいい。ほら、今かすかに風の音が聞こえたよ。

でもCDコンボから流れ出した合唱用の曲にかき消されてしまった。

楓は一生懸命に指揮した。

だけど段々元気がなくなっていくた。

皆のたくさん目の目が、いつせいに楓の姿を捉える。

何度も、見たいというから。一時間近く、楓はさまざま……けれども好意の力ケラもない視線で見られていた。

その悪意は楓の心の内側に入り込み、めちゃくちゃに壊してしまうのに十分だった。唐突にマリオネットの糸が切れたようにがくと楓の両腕が下がった。誰かが言った。

「ちよつと、何。その態度」

「曲の途中で、指揮するのやめるなよ」

男の子の一人が、椅子に蹴りを入れる。

靴下であがっていた楓は衝撃で、椅子から滑り落ちて、床に転がった。前髪で隠れていてよくは見えなかったけれど、泣いていた。私も目に滲むものがあつた。でも涙を流したら何をされるか分からなくて、恐怖で涙はギリギリのところまで押しとどまった。

頭が痛くてたまらない、こんな傷ついた楓は見たことがなかった。あの優しくて私のお姉さんみたいな楓のこんな……

「しょうがないなあ」

久保田さんと仲のいい女子の一人が、楓の体を起こした。

やる気を見せられなかったら罰ゲームものだと言った歌菜って子だ。歌菜は髪を強く掴んで、楓の頭をのけぞらせた。

痛みで苦しげな声を上げ楓は目を大きく見開いた。

可愛らしい声で歌葉は言った。

「この、うそつき」

楓を見下しながら久保田さんは言った。

「そうね。うそつきよねえ。国城さんは私達に言う前に、ものすごく練習しないといけないわね。だって審査の途中で指揮を放棄しちゃうんだもの」

そうして楓は毎日、合唱の練習の時間ずっと指揮棒を振り続けなければいけなくなった。

視線は前を向いてやる気溢れる指揮を。そうしなきゃ椅子に蹴りを入れて、何度も床に落とすよと久保田さんは言った。そして実行された。やがて楓は力のない目、表情で体を大きく使った指揮を、何度も何度も繰り返し続けた。その様を見続けた私は、少しずつ楓の心が壊れていることが分かった。だけど私は怖くてどうにも出来なかった。はじめにあった悪意がぐるぐると教室中をめぐり、どんどんふくれあがり、楓はいじめていい子となって、彼女をどんどん追いつめ苛んでいった……その無邪気に膨張する悪意の恐ろしさの前で、私は動くことが出来なかった。かわいそう、おかしい、たすけたい、私がこのいじめの口火を切った、そう思っていたけれど……何も出来なかった。

第七話

それでも今日という日がくるまでは、わたしはただ怯えているだけでよかった。教室の中でぐるぐるとまわり、膨張する悪意に、立ちすくんで弱音を心の中で吐くだけですんでいた。

久保田さん達は、楓に私が久保田さん達の言った言葉を伝えていなかったから。私は楓の立場を損なわせながら、ぎりぎりのラインにすることが出来ると思っていた。

この悪意の暴風がおさまれば、きっと……以前のようにまた幼馴染として仲良くやっていけると……そんな都合のいいことを。

「そんなこと、ちよりが言うわけないでしょう！」

楓の声が上がる。

昼休み。楓は教室の片隅で久保田さんたちに責められていた。

責められている理由は楓が何故存在しているかについてだった。

私は椅子に座って、本を開いて読むふりをしながら、久保田さん達や楓の言葉に聞き耳を立てていたが、唐突に出てきた自分の名前に背筋が凍る。

思わず、やだ、巻き込まないでよと心の中で呟いてしまった。

「そんなことないって。結構ちよりちゃん、あなたのこと言ってたよ。嫌わなきゃ言わない言葉ばかりね」

久保田さんがこれ見よがしに大声を出していると、歌葉が私の下にやってきた。

「ねえねえ。ちよっち。ちよっち、きてよ」

「な、何で……」

肩をすくませビクついた声を出す私に、きょとんと目を丸くして歌葉は言った。

「何でって。この前ちよっち、教えてくれたじゃん。あの虫がさ、指揮者の件で、いろいろと……」まんな発言をしたって」

「それは……」

うそ、なんて言えなかった。

しかし歌菜は私の引きつった顔や声で、何かを悟ったらしい。急にニヤニヤし始めた。

「何かさあ、よく分からないけど。あの言葉が嘘だろうが、本当だろうが、そんなのね、問題じゃないの。言ったかどうかなの。そしてあんたはしゃべった……虫のゴーマんな発言集を。たとえ本心とは違って、言ったのは変わらない。それなのに自分だけ、きれいな面しようなんて、ちよつち……悪女だなあ」

可愛らしい声で歌菜は、獲物を狙う蛇みたいに目を細めた。そしてゆっくりと耳元に唇を寄せる。

「歌菜達、お友達でしょ。裏切るの？ 裏切ったら、どうなるかなあ」

私は首を横に振った。

「う、裏切らないよ。と、友達は裏切らないものじゃない」

「だよねえ、普通は。じゃあ私達を絶対、裏切りませんって言うよ」

「何で……」

「あんたは普通じゃないから」

歌菜の鋭い視線が私を射抜いた。

うそつきを信用するのも大変なんだよおと歌菜は囁く。

真綿で首を締め上げられているような息苦しさ能耐えながら私は言った。

「……私はっ、久保田さん達を裏切りません」

だから何もしないでくださいと心の中で呟きながら、私はすぐるような目で歌菜を見た。

歌菜は私を見下し、それから髪を数本つまんで一気に引き抜いた。

そして、痛みで顔を歪ませる私を見る。

「へえ。いい匂いじゃん。歌菜にちよつちが使っているシャンプー教えてよ。友達でしょ？ いいよね」

……涙目で私は頷くことしか出来なかった。

私は歌菜に引つ張られて、久保田さん達の所へ行った。何だろう、この感覚。自分が自分じゃないような感じ。自分の声が遠い、目にうつる楓の姿が遠い、自分という存在があるということすら忘れてしまいそうなくらい、自分が遠い。

私は何なの。久保田さん達の言葉に頷き、いかに楓が傲慢な人間であると話す私は、私なの。

うそ臭い、うそ臭い、うそ臭すぎる……だけど現実だ。

さっきまでどんなになじられても、涙を流さなかった楓の目から、ぼろぼろ水がこぼれていく。私は熱っぽい体に冷や水を浴びたように、意識が立ち戻った。思わず両手で口元を押さえて目を見開く。

「ちより」

弱弱しい小さな声で私の名前を呼んで、それから楓は全力で久保田さん達を押しつけて教室から出て行った。

久保田さん達は楓を追いかけることはなかった。

しかし遠くまで響きそうなくらい大きな馬鹿笑いが起きた。誰かが言った。

「なによあれー。マンガみたい。悲劇のお姫様きどりい？」

楓……楓っ。

私は馬鹿笑いをよそに楓の名前を何度も呼んだ。思い浮かぶ楓の姿は私の言葉で涙を流していた。

そのイメージが拭いきれない。何度も心の中で謝っても、心の中の楓の姿はただ泣き続けるだけだった。

駄目だと思った、このままじゃ……心の中で謝罪したってしょうがない。楓、ごめんなさい、ごめんなさい！ そう本人に言わなければ、この罪悪感から逃れられない。

私は教室を出た。とにかく楓を探した。

今更かもしれない、けれども謝らなければ。
楓を傷つけてしまった……その罪を。楓からの許しが欲しかった。

「ごめん。謝られても迷惑だわ」

楓は私の謝罪に、淡々とした口調で言った。

何度も水で顔を洗ったのだろう、髪が生え際が濡れていたが、涙で赤みが増しているはずの顔はすっかり普通に帰っていた。私は楓の言葉が信じられず、もう一度謝った。

「ごめんなさい。嘘なのさっきの言葉は。久保田さん達の言っていた言葉は全部嘘なの。全然、楓を傲慢だなんて思ったことないよ」
むしろ貴方が私の姉のような人間だった。

楓は視線を落とした。

「知ってる。さっきのちよりは、いつものちよりじゃなかった。それに久保田達に言った言葉も、どうせ嚇されたんでしょ。あいつら外面いいことで評判って話を聞いたことがあるし」

「な、なら」

「だけどね、ちより。そういう問題じゃないのよ」

きつぱりと私を強い視線で射抜きながら、楓は言った。

「ちよりが実は嘘だったんですって。私に謝っても、今までのことを取り返せる？ 無理よね。クラス全員の前で言っても同じ。どうか確実にいじめのターゲットはちよりにかわるでしょうね」

「……」

「だからね、もう遅いの。ちよりの言葉じゃ現実を変えられない。というか、疲れた。むなしくてたまらない」

「楓」

「ごめん。もうしゃべらないで。わめきたくてたままないの、あんなを罵りたくてたままない。それは嫌なの」

苛立たしげに、楓は自分の髪をかき上げた。

「こんな状況じゃなきゃ、いっぱいちよりとしゃべりたいのに……どうしてこうなっちゃうの……歌うことを望むって、そんな大層な

「ことでもないのにさあ」

私は悲しい楓の呟きを立ち尽くしながら、聞くことしか出来なかった。

私はどうすればいいのかわからなかった。

謝れば何とかなると思っていたのに、謝ることがかえって楓を傷つけるなんて思いもよらなかった。

お兄ちゃん、どうすればいいの。私はどうすれば楓の悲しみが終わるのかわからない。言葉が無力ならどうすればいいの？

私には分かんないよ。お兄ちゃんに頭を撫でられたい、おいしいお菓子を食べさせて欲しい。この痛みをどうにかして……

私はお兄ちゃんの住むアパートに向かった。だけどそこにいたのは、兄じゃなかった、知らない男の人だった。

アパートの階段の途中。

兄は女の人に私には見せたことのないような晴れやか笑みを見せていた。

そして兄は何か感激した様子で女の人を抱き締めていた。

「そっか、そっか。フウカなら成功すると思ってた。さっそく祝わないと」

「どう祝ってくれるの。伊織」

女の方は茶目つ気のある表情で、兄を見つめる。

「うーん。まあこういうこともお祝いなんだろうけど」

兄は女の人を抱き締めていた腕をほどき簡単な呪文を唱えた。女の方の掌にシュークリームが一つ現れる。

「もつとちゃんとやりたいなと思うよ」

女の方は手が汚れるのもかまわずシュークリームに嚙りつきながら言った。

「ふうん。まあ悪い気はしないわね」

兄は苦笑して、こつんと女の方の額と自分の額を合わせた。

「いい気になってくれよ。普段は絶対こんなこと言わないんだぞ」

ちよつとすねた声で男の人は言った。

単なる恋人同士のいちやつきにしか見えない図。

私に見せたことのない表情、ぽんと出されるシュークリーム。そして聞いたことのない口調と言葉。

そうだ、兄はことあるごとにお菓子を出す。祝いの席でも慰めてくれる時も。それはとてもおいしくて、私の心を癒したり、祝いの席を盛り上げた。だけどそれだけなのだ。

優しい言葉とお菓子、それが私の兄に対するイメージの根幹だった。けどそれだけじゃないのだ。あの女の人に見せる面、能力もあつたりして。お兄ちゃんのこと、私は全然知らなかった。いや知るところを拒否していた。辛い時、お菓子を食べさせて欲しい、慰めて欲しい。そう自分の要求を通せればよかったのだ。そういう都合がいものだったのだ。

自分の心が燃えている。臭くて痛くてたまらない。お兄ちゃんは私の隣にいて当然と思う感情が、私を燃やし尽くそうとする。

「……やだあ」

私はさまざまな意味を込めて呟き、その場を後にした。

兄に今の私を見せるなんて……とてもじゃないけど出来なかった。

とぼとぼと道を歩く。

最初は泣いたり、お兄ちゃんに文句つけたりした。けれどもどうにもならないことを時間が経つ程理解出来た。

だから……私は一人で今回のことを考えるしかなかった。

もしかしたら、はじめてだったかもしれない。いつも兄がいた、もしくは楓がいた、どんな時でも私には味方がいたのだ。

けど今はいない。けれどもこんな状況になって私はゆっくりと痛みにもがき、同時に深く問題を考えることが出来た。

言葉だけじゃ無理なら、私は楓をどうすることが出来るのだろう。考えて、考えた。結論は一つだった。行動する、それだけだった。

行動しなければ、何も変わらない。でも行動しても、私には物事を変えるための力は……あるのだろうか。いやここで迷っても、もう私には後がない。やるしかない。

私は何だ、何の血を受け継いでいる。

私は魔法の使えない魔女だ。お兄ちゃんが言っていた、すごい力があるから、母さんはお前にきつい態度をとると。

だからやれる、けれど魔法を使えるくらい成長しないといけない。

今までずっと逃げていたことに挑戦しないといけない。

あまりにはじめての経験に一瞬、心がゆれて足がすくんだ。私は両掌で両頬を強くたたいて活を入れた。

私にその力が眠っているなら、早くたたき起こして楓を助けるための力にしたい。そうしなきゃこの罪を乗り越えられない。

さあすぐ行動しないと。私は母さんに電話をかけた。

「あ、お母さん。あのねお願いしたいことがあるの」
獣がうなるような風の音が聞こえる。

私を中心として、いつのまにか強い風が吹いていた。

最終話 魔女と歌うたいの歌

朝から憂鬱。

今日は平日で学校に行かなければいけない。

最近練習している曲が難しく、何度も先生に怒られている。二週間前から話したくないと言った幼なじみが、学校をたび

たび休んでいる。そんな憂鬱になる理由リストの中に、今日一つ新しいものが加わった。

学校の側に、廃田となつて放置されているうちにコスモスの花が咲き乱れるようになった場所があるのだが、いつのまにかその土地を利用して保育所を建てることが決定したそう。土地の調査はすでに終了していて、数日したら、色とりどりできれいなコスモス畑はシヨベルカー等で掘り返され、真っ平らにきれいにならされた土一色へと変わってしまうそう。

中学に入って楽しみの一つが、満開に咲いたコスモス畑なのに。元々沈みかけた私の気持ちは、底を突き破り、浮遊していると思ってしまうくらいゆっくりと底なしへと沈んでいった。頭がぼんやりする。

学校へ暗い表情で登校したのが悪かったのか。久保田は私を見るなり、「体調悪そうだね。帰れば。こっちの気分が悪くなっちゃいそうだし」と言った。

正直、好き勝手言いやがつてと思わず毒突きたくなる。だけどこの教室では、この女の考えが力を持っている。この女の声が皆に広がっている。

実は少し気づいていることがある。

久保田や、彼女に取り巻く連中がたまたまいなかったりすると、教室の空気は少し優しい。プリントを机に投げ出すように置くことはないし、昨日のテレビの話は私はクラスの女子と話したりする。だけど、久保田達が来ると、皆はまるでコンクリート製の壁なのかと

思ってしまうくらい態度を硬化させる。

その態度が、また教室内の現状から目をそらそうとする態度、無関心、迷惑といわんばかりの目が、私の心をギョウギョウに締めあげる。ある意味、あいつらの行動よりも神経がまいってしまう。

私はいつこの牢から抜け出せるのだろう。

現状を余裕ぶって考察してしまうけど、本当色々やばい。叫びたい。誰にも言えないけど、心配かけちゃうから言えないけど、ほんの少しだけ、本当ほんの少しだけ、思うことがある。

いつそ、誰か殺して欲しい。

そこまで私の存在が消えて欲しいなら、私が寝ている間に、首を絞めあげてしまえばいいじゃないと思う。毎朝、今日も学校に行かないといけないのかと思う絶望感から始まる一日を、終わらせてくたさい。

「死にたいって思ってるんでしょ。じゃあ死ねよ。自殺すれば。私達の迷惑にならないようにね。死んでも迷惑って最悪だし」

そう言われたって自殺が出来ない弱虫だもの。母さんと父さんのことを考えたら、何も出来ない。ずるいだろうけど、そう思う。

ああ痛い。痛いよ。

この牢の中、床に棘が生えている。

鉄製でそんなに鋭くないけど、正座した膝にじわりじわりと重い痛みを与えている。

久保田達に罵倒された時は、針のように細くなって体を貫通する。でも涙が出ることがあっても、血は流れないから、死ねない。ただ心は一步步けてほっとする程に、臆病になって磨耗している。

どうしてこうなったのか、訳が分からない。私だって望んで指揮者になったわけじゃない。よく分からない平等な競争のためのハンデになるから、指揮者にならなきゃいけなかった。本当は皆と歌いた

かった。

だけどこうなったらしょうがないと受け入れて、指揮者として頑張ろうと思ったのに。

辛い、苦しいとか痛み、そして助けを求める言葉は、久保田達を喜ばせるしかない。無関心でいればいいかもしれないけど、私には無関心でいられる程の場所がない。まったく、本当……どうしよう。実は最近、心に何も浮かばない瞬間が訪れて、ただあいつらの言葉を受け入れ頷く、人形な私がいる。心の死が差し迫ってきている。怖い、怖くてしょうがなかった。

今日はなんだか風が強いようだ。

風が窓をたたく。きしきしとなる窓。

天気予報は強風だと言っていたいなかったのに。

そんなことより、またこの時間がきた。

あいつらが活発に行動する、昼休み。

私の学校は教室管理がちよっと適当で、普段使われていない特別教室はよく鍵がかかっていない。

使われないから、鍵の管理すら適当であることも気づかれないから、誰も立ち寄らないから、教室よりももっとタチの悪い行動が横行する。

久保田が罵倒したと思えば、一番彼女と仲のいい歌菜が私の二の腕を抓りあげた。本当こいつらは容赦がない。

言葉を使って心という形のないものを傷つけて、二の腕や髪など外から見えづらい部分を傷つける。そして外にけして漏らさないように、こう言うのだ。

「絶対に告げ口しないわよ。言ったら、ねえ。ちよりちゃん、どうなるかなあ……かなり雑魚だし、すぐに壊れちゃいそうで、つまんないかも」

幼馴染の名前を出してくる。

たしかに彼女は、心がすっかりしていると言い難い。だから耐えなきゃ、せめてちよりを守らなきゃ……

唐突に特別の教室のドアが、強い風で飛ばされ勢いよく床へと落ちた。びくつと肩を竦めながら、私と久保田達はすつきりとしてしまった入り口を見つめる。そこには一人の少女。うちの学校の制服を着て、魔女を連想させる真っ黒で大きな帽子を深くかぶっていた。鼻から上が見えない。

いったい何なのと思っていると、いつになく低い声で歌葉が言った。「お前、何。誰だよ」

少女は一步、足を進めて言った。

「私？ 私は魔女よ。っていうか、楓から離れてよ！」
続けて少女は久保田達を指差しながら言った。

「お願いフウジ。けちらして、あいつらを」

それはいったいどういうことなのか。

うまく頭が回らない、整理が、つかない。

ただ久保田達が、強い風の固まりみたいなのに突き飛ばされ、床へと転がされていく。少女はまっすぐ私の元に駆け寄り、声をかけた。

「大丈夫？ 楓」

あまりの状況に心臓の音がはやくなっていたが、聞き覚えのある声に、私は少女を凝視する。

「あなた、もしかして」

「うん。助けにきたよ」

少女は口元に笑みを浮かべた。そして声を張り上げる。

「フウジ、しばらくここをお願い。もうこれでもかっつくくらい暴れて！」

獣のうなり声に似た風の音がする。

風の音がした方向を見ながら少女は大きく頷くと、私の手を取り廊下へと飛び出していった。そして屋上へと続く階段をのぼって行っ

た。やがて重い鉄の扉の前、少女は小さくよく分からない言葉を紡ぐと、後ろから激しい大風が吹き、あっけなく扉は前に倒れた。そして屋上へ足を進めると……私は息を飲んだ。

花が、花びらがひらひらと落ちてくる。

コスモスの赤白ピンクの花がたくさん。

柔らかな風につて、地上に……

「これは……」

呆然としたまま空を見上げる私に、少女は魔女のような帽子を脱いで言った。

「魔法だよ。私、風を自由自在に操れるからね。コスモス畑の花を全部風で空中に上げて学校まで持ってきたの」

私は少女の方に体を向けながら言った。

「やつぱり、ちよりか。聞き覚えのある声だと思ったわ」

ちよりは頷いた。

「うん。綺麗でしょ。お母さんにね、楓を魔法で助けたいって言うたら、ならもつとんでもないことを起こしなさいって。普通じゃ有り得ないことを起こして、自分の行為を隠しなさいって」

「……落ち葉を隠すなら森って訳か」

「うん。意外にお母さん、こういうことにノリノリな人だって、はじめて知ったよ」

「ふうん、そうなんだ」

私は呟きながら、ふと昔を思い出した。

幼い頃、近くの公園で一緒に歌った後に、ちよりはかえちゃんだから教えるねとこう言ったことがある。

「私ね、魔女なんだよ。魔法はまだ使えないけどね」

それは本当に幼い時に話す、ファンタジーな発想なのだった。たしかにちよりの家は、色々と不可思議な話が聞こえてきたけど。しかしこんな光景を見せられると、自然と体から力が抜けた。

「か、楓」

おろおろとした様子で、膝を崩した私にちよりは目を向ける。それはいつものちよりで。さっきまでの普段とは違ったしっ

かりした姿とは落差が大きくて、私は思わず笑った。

久しぶりに大きく、馬鹿笑いをした。

「どうしたの、楓え」

私は顔を横に振り、目を軽く拭った。

「あはは。何だかおかしくて、本当色々ぶっとんじやってるなあ。

ふふ、はふ」

「……ねえ楓」

ちよりは静かな声で私に呼びかけた。

「ん？」

「ごめんね。二週間、かかっちゃった。楓をすぐに助けたかったけど。でもその力を得るためには、私は無力で……すごく時間がかかっちゃった」

私ね、ひとりぼっちになる瞬間があって……その時に楓の気持ちに分かった気がしたの。

こんなに逃げ場のないまま、痛みと直面しなきゃいけなかったのかって。楓の立場が想像出来たの。だからこそ、楓を助けたかったの。「大事な幼馴染だから。私が引き起こしたと思えば、何かやらなきゃって。楓を助けるために何かを。それで、それ……」

ちよりは言葉を途切らす。

私がちよりを抱き締めたから。

目からあたたかい水が出て頬をつたって、制服に落ちて、染みがどんどん広がっていく。

私は何も言えず、ただぎゅっとちよりに抱きついて泣き続けた。ちよりは最初おろおろとしていたが、やがて私の背中を優しく撫でた。

素直に思いを吐いた。

「助けてくれてありがとう」と。

あの成長することが辛そうなちよりが、私を助けてくれる日がある

なんて思っていなかった。ちよりはとても弱いから、色々しようがないと思っていただけ……だけど彼女は努力した。

私のために、成長した。

「楓。こっちこそいつもありがとう。私をいつも守ってくれて、ありがとう。私、甘ったれだから、こんな追いつめられなきゃ、気づかなかった。本当、ありがとう」

ちよりの目から、ほとほと涙が落ちた。私たちはお互い額を合わせて、涙が自然に収まるのを笑いながら待った。

やがて涙が止まると、優しい青の空の下。柔らかに落ちてくるコスモスの雨を二人で座りながら眺めた。

私はぼつりと言った。

「何か、合唱曲を思い出す光景よね」

「あーうん。ちよつと参考にしたんだよね」

「そうなんだ……」

合唱曲は風に舞う花、花びらが目に浮かぶ未来への応援歌だった。ちよりは言った。

「ねえ、ちよつと歌わない？」

「何を？」

「合唱曲」

「……」

「ダメかな？」

もじもじとしながら聞いてくるちよりに私は顔を横に振った。

「ううん。最高だと思う」

うん、最高。すごく気に入っていたから。

それを幼馴染と一緒に歌えたら、尚更だ。

私は立ち上がると、ちよりの手を取り、体を引き上げた。そして目をつむり、声を出す。

歌を声で紡ぐ。遅れてちよりも声を出し、やがて二人の声が重なり、屋上に響いた。

最終話 魔女と歌うたいの歌（後書き）

最終話です。3月3日に完全改稿しました。校正と一部シーンの付け加えです。読みやすくなったのだと思います。ではでは読んでいただきありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5324i/>

魔女と歌うたいの歌

2010年10月10日02時49分発行